



自由の代償は小さくない

2年ほど前から急激に民主化運動が盛り上がりを見せた中東諸国。しかし残念ながら、現在もイラクをはじめエジプトなど、政情不安を抱える国は少なくありません。民主主義が当たり前の日本に暮らしている私たちにとっては、例えばインターネットが一方的に遮断されたり、選挙が公平に行われなかったり…といった状況はとても想像できません。しかし、現実にはまだまだそうした国々があるのだと改めて感じ、自由について様々なことを考えました。

私が今までで一番「不自由さ」を感じていたのは、中学～高校生の頃、校則が厳しい私立の女子校に通っていた時でした。制服のサイズや丈はもちろん、靴下やカバンの色そして大きさ、髪型さらには筆記具などに至るまで、全てが校則で決められていたので、個性を出したりオシャレをしたりといったことは、不可能に近い状態だったのです。

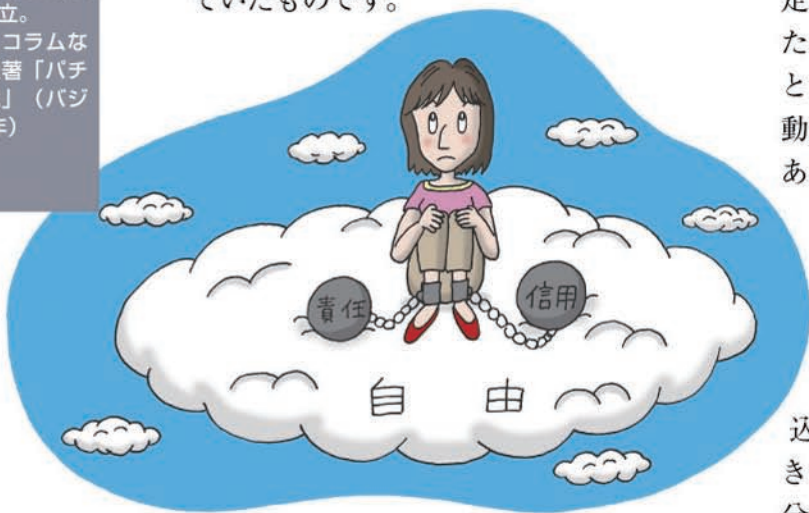
まあ「志願して私立に入ったのだから、我慢せよ」ということにはなりますが、若い女学生のこと、よく数人で「校則なんかなくなって、もっと自由にさせてくれればいいのにねー」などと、文句を言っていたものです。

その後、大学へ進むと今度は一変して、単位さえ取れば後は全てが自由という境遇になりました。そうすると、自分でどんどん決めて動かなければ、あっという間に学生生活が無駄に終わってしまいます。私はどちらかというとな動的な人間なので、積極的にやりたいことを決めて活動の幅を広げていきました。続いて会社勤めをしていた頃も、時間などの制約はあるものの、とりあえずは仕事をこなして大きなミスをしなれば、それなりに自分の居場所を見つけることができたものです。

そして20年前に独立してからは、再び大学生のような…いや、もっと遥かに自由な立場になりました。仕事をするのもしない(断る)のも自由、原稿の締切とある程度のクオリティさえ守れば、私生活についても誰も何も言いません。独立して間もない若い頃は、そんな環境が楽しいなあーと思っていました。

しかし、年月を経て「ベテラン」などと呼ばれるようになると、特に私のような特殊な仕事をしている人間にとって敵は「自分自身」しかいなくなり、気づくと「責任」や「信用」といった重い枷が、足下にあるではありませんか！ 間違ったことを書けば、それがそのままデータとして残ってしまう恐ろしさ。自分の言動が、業界のイメージにつながる部分があるのだという責任感。そうしたものは、

実はあんなに欲しがって謳歌していたつもりの「自由の代償」であったに違いないと、最近になってやっと実感し始めたのです。自由を気取っていても、ちゃんと社会の一員に組み込まれている不思議さと面白さ。それはきっと、ある程度年齢を経てみないと、分からないことだったのかもしれない。



じんぼう・みか

法政大学卒業後、文具メーカー勤務を経て業界誌記者となり、1993年独立。

取材記事、コラムなど連載。近著「パチンコ年代記」(バジリコ、07年)